

---

# 無能と従姉妹と愉快的仲間

チキン執事

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

無能と従姉妹と愉快的な仲間

### 【Nコード】

N8611Y

### 【作者名】

チキン執事

### 【あらすじ】

可愛く頭の良い従姉妹を持ち苦悩の日々を送る今では普通の高校生  
の眞浦晃汰。  
そんな彼の周りには当たり前の様に色々なバカをやらかしていく仲間たちと共に振り回されて今日もいく。

彼の気持ちは彼女に届くのだろうか……？

（タイトル大幅変更しました！旧タイトルバカとテストと……君

と出逢えたから  
)

## 第一問 未知なる遭遇？（前書き）

どうも、最近スランプ過ぎてこんなもの書いちゃいました。

要は逃避です。

ちよっ！やめて！石投げないで！すいません！

まあ、暇潰しになってくれれば幸いですね。でわ、どうぞ！

## 第一問 未知なる遭遇？

く???? side

「ねえアナタ起きて」

ある一室。近所でも仲が良いと評判の普通の家庭の普通の家族の声が聞こえた。

その声で目覚めるはその夫。名を            と言う。

その男はムクリ、と中肉中背の体を起こし、何よりも先にリビングへと足を運んだ。

「おはよう」

男が朝一番に女性にそう声を掛けるとその女性は料理の手を一度止め、

「おはよう」

そう返した。

男はその挨拶を確認するとリビングのテーブルへと向かい、ある『話を彼女にした。

「そう言えば、『あのバカ』。アメリカから帰ってきたらしいぞ?」

そう告げると彼女は一瞬目を見開き、

「あのバカって……………ああ。彼のことね？」

きつと昔の事を思い出したのだろう。顔が自然に微笑んでいる。

「ああ……………本当に昔はバカやったもんだなあ」

しみじみと呟く。

そう、あれからもう、13年たった。

不意に、壁に貼られている写真に目がいく。

そこには紫色の髪をしてカメラをもった彼と赤髪で活発そうな男、茶髪で明るそうで、『バカ』そうな男と少し青み掛かった髪をもつ少年と二人のそっくりの『女の子』とピンク色の髪をしている彼女、ポニーテールの髪の勝ち気な女の子、物静かそうで黒い艶やかな髪をもつ女の子、いかにもボーイッシュといった感じの女の子がみんな仲良さそうに写っていた。

男はその写真を少し遠い目をして眺めていた。

「ふふっ」

そんな彼を見たからか少し笑って彼に近づき隣に座った。

「そうね……………。懐かしいわね。何もかもが」

彼女の少し意味深な台詞。

何もかもが、懐かしい。

確かにそうなんだろう。

何故ならあいつらとの出逢いは始まりであり、過去の、終わりであった。

そう、彼らは『彼ら』と出会えたから。

チュンチュン……。

空いた窓から洩れるのは雀の鳴き声とカーテンから洩れる日光。

「う……うん。……ん」

寝返りを打ち、その日光から目を背ける様にして毛布を顔に被せた。

この春先の季節。暑い……とまではいかないが中々暖かい季節。

もうこの毛布も必要なくなるかな。と、思いつつも俺にまた眠気が襲い掛かる。

時計も見えてないので何時かは知らないがそんな事はどうでもいい。

今はとにかく眠りが欲しいんだ。

そう心のなかで呟き、薄く開けていた目を、自分の欲求を満たすために再度閉じた。

しかし。

P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i P i

そんな耳障りな高音によって睡魔は一気に無くなった。

「……………」

喜んで良いのか悲しんで良いのか。

よし、ここはポジティブに早く起きて良かったー。等と考えておこう。うん。よくやった目覚まし時計。よく起きた俺。

しかし返ってくるのは当然沈黙だけ。その沈黙が手の中にある目覚まし時計の音を響かせ虚しさを煽る。

『晃汰！出来たよ！』

そんな沈黙を破るように聞こえたのは女の子の声。

別に妹や母ではない。

俺にはそんな存在は居ないから。

いや、居た。と言つべきか？



そんな事を起きたばかりの頭で考え少し苦笑する。

『ねえー晃汰！』

どうやら遅くなったらしく、少し焦り混じりの声がしたから聞こえる。

「ああ、悪い！いま行くよ！」

俺はそう返し、扉をあけ階段を降りていく。

階段を降りきって廊下を歩いていくと段々リビングからいい臭いが漂ってくる。

臭いが、強くなる。

カチャリ、と鉄製のドアノブに手をかけ引くとそこには声相応の女の子が一人。

名を、小鳥遊 たかなし すみれ 堇と言う。

補足説明をするなら俺の従姉。

俺の姉のような存在。

親よりも必要な存在。

そして俺の初めての。

「はい、今日は昨日の余りの肉じゃがだよ。ってどしたの？私の顔じつと見つめて」

「へっ！？ああ！大丈夫！いい天気だな！！」

「今日曇りだよ？」

「……………まあいいや。うん。頂きます」

「はいっ。どうぞ」

董はもう食べてきたのか自分のご飯をよそわない。

俺がご飯を食べてるのを見つめてニコニコしてる。

「あの……食べにくいんだけど……」

「え？ああごめんね？分かったよ。バレないように見るね？」

「すこぶるずれた解答をありがとう」

「えへへへ」

そんなやり取りを繰り返しながらもご飯を食べる。

「そう言えばさ」

そんな董の声に俺は箸を止めずに聴く。

ああ、肉じゃが美味しいなあ。

「今日の振り分け試験晃汰はどれぐらいいと思う？」

ピタリ、と。

止まる。

いや！止まるどころか箸を手から落とした。

チクタク……チクタク……。

嗚呼、無情に響くは秒針の音。

「晃汰……？も、もしかすると何だけど……」

何？なんて声がでない。出せない。

「もしかして」

だって、

「今日が振り分け試験だったこと、忘れてた？」

余りのやつちまった感に声なんて出せないよ。

カッカッカッカ……。

辺りに聞こえる音は必死にペンを走らせる音のみ。

そう、回りに聞こえるのは。

シーーーン。

一変。これは自分の机から発せられる物だ。

あれ？おかしいな。なんで俺だけこう、筆が走らないんだろう？

シャッシャッシャッシャーーーー！！（必死にペンを走らせる音）

いくら問題を解こうと思っても紙に書いてしまつのは落書きばかり。

ほら、頑張ろうぜ？俺の脳みそ。

頑張ってくれよお…。

ペンを持った腕をプルプルさせながらも頭はフル回転。しかし全部空回り。

カッカッカッカッ…。

さらに周りのこの音が更に俺の心を焦らしていく。

く、くう……。こんなんなら…勉強しとけば良かった……。

そんな事を考え頭を抱えていると、

ガシャァン！！

そんな誰かが椅子から落ちたかのような音……って！

「だ、大丈夫か！？」

俺は焦って立ち上がり、『その子』に声をかけた。

「だ、……大丈夫……です。……す、すみません」

彼女は顔を赤く紅潮させていて息づかいも荒い。

俺は彼女のおでこに手を当てた。

「だ、大丈夫じゃねえよ！凄いい熱がある！」

「だっ……！大丈夫なんです……！」

「大丈夫じゃねえって！」

あまりに熱が高いので俺は慌てて先生を呼ぶ。

「おい、眞浦。早く席に戻れ。そうしないと無得点扱いだぞ」

先生が、やって来た。

「なっ……。で、でもっ！」

「良いから早くもどれ。姫路はもう続けられ無いらしい。無得点だ」

「……………はいわか「ふざけるなっ！」……………!？」

沈黙を引き裂くような怒声。

驚きながらもそちらに目を向けるとそこには一人の少年が居た。

「うるさいぞ吉井。それ以上騒ぐんなら貴様も無得点扱いだ」

「黙るのはお前だっ！姫路さんは頑張ってるのにどうしてそうなるんだよ！」

「仕方がないだろう。姫路はこんな状態だ」

「くっ！………分かりました。じゃあ僕が姫路さんを保健室までつれていきます」

「さて吉井！お前も無得点扱い」かってにしてください」チッ………勝手にしろ！」

バタンツ！扉が閉まってから数秒。

また、カッカッカッカッカ…と筆の走る音が聴こえてくる。

俺は周りの奇怪な目にようやく気が付き、慌てて席に戻り、ペンを持った。

………。  
………。  
………。

キンコーンカーンコーン

結局勉強しなかった俺は、問題なんて全くと言っていいほど解けなかった。

良くてF。普通でF。悪くてFだ。

……もうどうしようもないじゃないか。

少しかだけ周りが気になり僕は董の方をチラリと横目で眺めてみると董はいつもと変わらない、ニコニコとした笑顔で背伸びをしていた。

あの様子を見てわかる。多分……てかほとんどの確率でAクラスだと思う。

だって董はいつも笑顔で可愛いし才色兼備だし、文武両道なまさに絵に書いたような美女なんだから。

はあ……。これで離れ離れか……。なんか寂しいな。

でも俺も一人立ちしないと。

そんな明日明後日辺りには折れる心意気を胸に、シャープンを筆入れにしまっていく。

さて……。帰ろうかな。

先程とは違う先生の帰りの話を聞き流し、最後の礼をして鞆を持ち、帰ろうとした。

でも、

「ちよっ！！ちよつと待ってえー！！」

そんな声が聞こえて、俺は足を止めた。

「ん？」

振り返るとそこには……

「やあ、さっきぶり」

あのときの彼が居た。

「君は……」

「あ、僕？あははそうだね、名前いい忘れてたよ。僕、吉井明久  
って言うんだ」

吉井、明久。

口のなかで反芻するように呟く。

「あ、ああうん。で、吉井くんが俺になんか用でも………？」

なぜか分からないがどこか自分はこの吉井に警戒をしている。

「ああ、ごめんね？いや、ただね？」



「お礼を言いたくて」

「お礼……？俺は別にそんな事を言われるようなことは……」

「え？だってあの時姫路さんを助けたよ？」

姫路さん？ああ、あの時の彼女か。

「でもそれは吉井くんには関係無いような……」

そう口ごもりながら言つと吉井くんは

「あ」

と、まるで忘れていた。と言つような表情をし、一拍してカラカラと笑った。

「あはは……。なんかお礼言いたいような気分になってたらいつの間にかそんな風に思つてたよ……はは……ごめんね」

頬を指で搔いて誤魔化すようにまた、笑った。

「はは……」

そんな彼を見て不思議と口から笑みが零れた。

「？何かあつたの？」

突然笑つたせいか吉井君が頭の上に疑問符をつけて首を傾げていた。

「ああ、いや、悪い。……それにしても面白いな、吉井くん」

そう言う吉井は、

「明久、で良いよ？ほら、呼びにくそうだし」

吉井がニツコリと笑って俺にそう告げる。

だが

「それは嬉しい申し出なんだが……悪い、俺にはまだそんなことは出来ない。……その代わり、『吉井』って呼んで良いか？」

そう、『俺にはまだ相手の名前を呼ぶような勇気がない』

怖いから。

「んー……分かったよ。んじゃあ吉井でお願い。君は……」

「眞浦晃汰だ」

俺が短くそう名乗る。

「眞浦君ね。それじゃあよろしく！」

そんな事を言って、また笑った。

吉井明久。

思えばこの馬鹿への第一印象は、

『馴れ馴れしい、でも良いやつ』

そんなものだった。

でも、このときからだった。

俺が変わっていったのは、こいつと出逢ったこの時からだった。

そう、この日を境に俺の生活は、人生は、ガラリ。それこそ文字通り、一変した。

今までより刺激的に、今までよりバカみたいに、今までより面白可笑しく、

成っていった。

## 第一問 未知なる遭遇？（後書き）

なんか最初っから微妙な始まり方でしたね。

まあ、皆様の寛大なお心でお許し下さいませ！

と、言うことでいつものことながら誤字脱字、矛盾点などの修正点、感想などを貰えると嬉しいです！

でも毒舌は程々をお願いします……。

たまに心に響くので。

**第二問**      **恐怖！お化け屋敷！……え？教室なの？コレ（前書き）**

ども……。チキン執事でございます。

更新が少し遅れましたね。

では二話目、どうぞ！

## 第二問

恐怖！お化け屋敷！……え？教室なの？コレ

やいのやいのと賑わう通学路。回りを見れば大多数の二年生がなにかを話し合っている。

まあ、それはきっとクラスの事であろう。

この学校。文月学園は二年生から振り分け試験というものをしなければならぬ。

振り分け試験とは、その名の通りクラスを振り分けるものだ。

その振り分け方はAクラス〜Fクラスまでの六クラスで段階分けされ、自分の点数の良さによってクラスが決まる。

聞いたことしかないが最上のAクラスは有り得ないほど設備が良いらしい。

はあ……それに比べて俺は……。

「……グスツ……鬱だ」

そんな感じで十分に一度は涙を流す俺。

「だ、だいじょうぶだって！ほ、ほら！きっとFクラスも楽しいよ？」

隣で励ましてくれる董。

なあ……董。励ましてくれるのは嬉しいんだが全然励まされないん

だけど。むしろ純粋な好意が心に刺さってイタイ。

「董」

俺が真面目な声を出して董の名を呼ぶ。

「ど、どうしたの？」

「いやいや、大したことじゃないんだけどさ」

フツと含み笑いを見せて……

「人間ってどうやったら楽に死ねるんだろうな」

「それは色々とアウトだよ!!」

言うと同時に身体をガクンガクンと揺らしてくる。

「眞浦、小鳥遊。仲睦まじいのは結構だが邪魔だぞ」

そんな、ドスの効いた声。

見上げるように顔を上げるとそこにいたのは顔の浅黒いスポーツマン然した巨躯の男。

「お、おはようございます……西村先生」

少し堅くなりながらも挨拶をする。何故なら彼は生活指導の鬼、西村教諭だ。ただでさえ見た目が鬼にちかいつつのに……。

「ん？何か言ったか？眞浦」

「ナニモイツテマセン」

「何故片言かは聞かないでおくが……まあいい。ほら、受け取れ」  
そう言つて渡されたのはただの封筒。

しかし、中に入っているものはこれからの一年をどう過ごせるかが決まってしまうものだ。

董は器用に紙を開けて中の物を取り出す。  
あ、Aクラス……。

「小鳥遊。代表とまではいかなかったがあと二十点で勝つてたんだぞ。がんばったな」

「えへへへ〜そうですか？」

そうやって他愛ない西村先生と董の会話が續いてる間も俺の苦惱は續いていた。

カリカリカリカリカリカリカリ……

むう……テープの部分が全くとれない。これじゃあ中が見られないぞ。

「私がやってあげるよ」

「あ」



ぱつと一瞬で取られてそして一瞬で董が開ける。

「ははは。眞浦。お前はどうかやら小鳥遊がないと駄目なようだな」

はあ……恥ずかしい。こう言う目で見られるからやなんだよ。

「はあ……あ、ありがとう。ほら、渡してくれ。董」

「はい」

渡してもらった紙を見るとやはりそこにはFの文字。

「だよなあ……」

「まあ、そんなに嘆くこともないぞ。何せ今年のFクラスは」

と、そこまで言うと思いやられる。といった感じのジェスチャーを一回し、

「Aクラスよりもよっぽど『楽しい』事になるぞ」

まあ、俺からしては悩みの種だな。と一言おく。

「楽しい事……？それってどういう……」

「自分の目で確かめることだな。ほら、行け。新二年生。新しいクラスが待ってるぞ」

そんな西村先生の言葉を聞いて柄にもなく心が弾む。

「はい！じゃあ行こつ？ 昇汰！」

「えっ！ちょっと！待てって！」

俺の手を引いて階段をかけ上がっていった。

「なんだよ……コレ」

「あ、あはは……。私もこれはちょっと予想外かも……」

思わず呟いてしまったこの一言。

いや、仕方がないと思う。

だって……

「リクライニングシートとノートパソコンと冷蔵庫で……教材でもなんでもないだろ」

目の前にはホール並の広さの部屋とまるで高級ホテルの様な様々な設備。

いや、まで。逆に考えてみる昇汰！

Aクラスの設備がこんないんだ！ならFクラスも

！

そう考えていた時期が僕にもありました。

董とはAクラスで別れ少しの期待を持ちつつもFクラスにいった結果。

Aクラスとは対極も対極。

最低というか人間的な生活を過ごせるかどうかも分からんボロ屋敷が目の前にあった。

取り合えずあれだよな。

「これは酷い」

それしか言葉が出てこない。

割れた窓から中を覗けばあるのは黒く腐った畳み。脚の折れた卓袱台。天井に蜘蛛の巣を生産する蜘蛛たち。

そしてその中に居るのは……

「あの赤髪のやつ……どつかで……」

中で静かになにかを考えているように鎮座している赤い短髪の男がそこには居た。

すると、目があった。

男はチラリと目を一度こちらに向け、また卓袱台に視線を戻した。

いや、なんかこのままだと覗き見みたいな感じだから入らないわけには行かないな。

よし。どんなに劣悪な状況でも学校生活を左右するのはやはり第一印象。いくぞっ！

意気込み少し勢い良く扉を開いた。

ら　　。

ガラガラガラ……バキィ！……バタン

「ああわ、扉が……」

扉が腐っていたせいか扉が外れて落ちた。

「っと……おいしょ」

扉を持ち上げはめ直し、もう一度向き直る。

「お、おはよう……」

きっと今の俺の顔は真っ赤なんだろう。  
とても恥ずかしい。

「よう」

後ろから聞こえた男の声。

そちらに目を向けると居たのはさっきの赤い短髪の男子が居た。

「き、君は……」

「俺は坂本雄二。このクラスの代表を勤めさせてもらう」

そう見た目からは考えられないような結構まともな挨拶をされ思わず怯んでしまう。

「あ、ああ。宜しく」

「そんなビクビクしなくともよいぞ。こやつは見た目こそ……アレだが根はいいやつじゃぞ？」

そんな中、聞こえてきたのは結構高めのアルトボイス。

そちらに目をやると綺麗な女の子がそこに居た。

「ええっと……君は……」

「木下秀吉じゃ」

「ああうん。分かった。木下さんね？」

「違う。こいつは『さん』じゃなくて『君』だぞ。ふああああ……」

あくびをしながら代表の坂本はそう告げる。

そうかそうか……さんじゃなくて君か。……ん？君？それって……つまり……

「うええええ！？男オ！？オイマジなのかよ坂本！今のが本当なら人類は大切な宝を失ったぞ！」

「うおつ。一気に口調変わったな。うんまあ。確かにこいつは男だ」  
ぜ、絶望だ。すべてを失った。もうここは肉の無い焼き肉の様なものだ。

「……いや、まて」

一見もう必要なさそうに見える肉の無い焼き肉。しかしそこにはまだ野菜が残ってるんだ！

野菜だつてやり方によつては色々なやり方もあるし肉の焼いた鉄板ならその味も風味として利用できる。

つまり……。

「……案外……それもいいのかもしれない……！」

「あつて早々こいつの位置付けと共にこいつをブタ箱にぶちこんできてやりたい気持ちが出てきたんだがどう思うよ？」

「わしが許可する。雄二、やってしまうがよい」

「ちよっ！待てよ！挨拶もまともにしてねえのにマジで！？もう肉体言語で行っちゃうの？いや、逝っちゃうの！？」

「大丈夫。逝くのはお前だけだ」

「てんめえええええ！？あつ！？ちよっ！マジ冗談だって冗談って卓袱台持つなああああ！？」

ゴス……！

このあとどうなったかは皆様の想像力にお任せする。

**第二問**      **恐怖！お化け屋敷！……え？教室なの？コレ（後書き）**

オリ主のキャラ固定が出来ない……！

難しいですね！

さて、いつもの事ながら誤字脱字。矛盾点、改善案、感想などをいつでもお待ちしています！



### 第三問 始まりの始まり（前書き）

随分遅くなってしまい申し訳御座いません。

ともかく年内に投稿出来て良かったです。

では、どうぞ。

### 第三問 始まりの始まり

『早く座れ、このウジ虫野郎』

俺の目が覚めて初めて聞いた言葉はこれだった。

いや、初めて、と言うのは少し語弊があるかもしれない。

何故ならこれは二度目のお目覚めだから。

俺はこぶの出来た頭を抑えながら先程の罵倒を吐いたゴリラ野郎を探した。

赤い髪が目立ちやすいのでゴリラはすぐに見つかる。

ん？教室の入り口辺りで誰かと話してる？

肝心の相手の顔は見えないがなんか最近聞いた声かも……。誰だっけな……。

頭のなかの曖昧な記憶を呼び起こそうと試みるが頭の痛みが邪魔で集中できない。

「お、お主起きたのかの」

目の前から聞こえてくる声にハッとなり顔をあげるとそこには木下とか言っ見た目以外は普通の娘が居た。

「お主。今、『娘』と言わなかったか？」

訂正。勘も少し常識の範囲を越えてるらしい。

「そんなはず無いだろ？木下ちゃん」

「ちゃん！？お主今『ちゃん』と言いおったな！？」

「おいおい、勘違いはよしてくれよ木下ちゃん。ほら、ジャンプのめだか ックスの球 川だって男をちゃん付けしてるぞ？」

善 とか。

「ううむ。そんなもんなのかの……？」

「そんなもんそんなもん」

勘の良さそうな木下は少し厄介だな。

こいつは弁解するより流した方が早いタイプだ。

「ん、起きたのか。いい夢見れたか？」

そんなところに現れたのは俺の意識を刈り取った張本人。坂本だ。

「ああ、今日の前で赤いゴリラと戯れてる悪夢を見ている所だよ」

「んだとゴルア！？」

「やんのかコラア！！」

お互いに胸ぐらをつかみ合い睨む。

「……………チッ！」

「……………ふんっ！」

「……………こんな変態と組み合わせただけ無駄だな」

「……………本当だよな。こんな赤ゴリラとふれ合うだけでも知能下がり  
そうだよ」

「……………あああああ!?!」

「お主らなんでそんな仲が最初から悪いのじゃ……………?」

「秀吉の言う通りだよ!止めなよこのバカ雄二!」

そんな中間こえたのは……………。

「んだと!?バカにバカって言われたくねえよこのバカ久!」

「バカってFクラスの珍獣ゴリラが言えんのかよ……………って」

「……………あ」

思わず顔を見合わせる俺ら。

だってそいつは 吉井だったから。

「ってなんだお前ら。知り合いなのか?」

「いや、知り合いって言うか……知り合ったと言うか……」

そつだよバカじゃん俺。あの時吉井は彼女を連れて保健室いったんだからFクラスに来るのは当たり前じゃないか。

「で、でも良かったよ！ほら、眞浦くんと同じクラスになれて！」

「あ、ああ。俺も嬉しいよ」

何せ他人からこんな純粋な好意を向けられることが久しぶりな俺にとって、吉井の笑顔は俺にはとても苦しかった。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

不意に背後から異様に覇気がない声が聞こえてきた。

そこには寝癖のついた髪にヨレヨレのシャツを着た、いかにも冴えませんがオーラの吹き出たおっさんが居た。

「それと席についてもらえますか？HRを始めますので」

と、言うことはこの人は恐らく担任の先生か。

いっちゃ悪いが流石はFクラス。設備も悪ければ……か。

俺はふう、とため息を吐きつつも後ろ側の席に座る。

「あ、眞浦くんここに座るの？じゃあとなり座っていい？」

「……………ああ、うん」

吉井がそういつて俺の横に座るとそれについてくるように坂本達も俺の近くに腰を下ろした。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。宜しく願います」

そういつて担任の福原先生は黒板に自分の名前を書こうとしたが、やめた。

え、何？チョークすらないの？ここ学校だよな？勉強出来ないよ？

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出てください」

……………ふむ。

「せ、先生。あなたの目は節穴なのでしょうか？申し出てくださいとかじゃなくて申し出無くても不備しか無いんですけど……………」

「それはFクラスにきた貴方のせいです」

「……………ですよね」

そうですね、はい。分かってるんですよ。この負け組の巣窟にきた以上俺も等しく負け組の負け犬なんだ……………。

「では皆さん、足りないもの、必要な物は極力自分で集めてきて下さい」

「「「「.....」」」」

皆は無言。いや、当たり前か。これで承諾しろって方が無理だよ。

「えー、では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

福原先生の指名を受け、ある生徒が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

お、最初は木下か。

それにしても何で爺言葉？もつと『かしら？』とか『ふふふ』とか、うお.....！やべえ.....脳内妄想で鼻血が出そうだ.....。

はあ.....でも実際かなり可愛いよな。

「眞浦、お主今良からぬ事を考えたであろう？」

立ったままの木下が横目で此方にそう言った。

え？怖っ！？読心術でも使えるの？

「いいや？別に何も」

俺はそう言つて鞆の中からラノベを出して読み始める。よし、自然な流れだ。

「またうやむやに……まあ良からう。以上じゃ。今年一年宜しく頼むぞい」

そう言つて木下が席に座ると次に立ったのはいかにも普通といった感じの小柄な男子だった。

まあ、

見た目だけだけどな。

この男子はなんでか知らんが至るところからカメラやら小型マイクやらレコーダーやら使い道が明らかにおかしそうな物を持っていた。

「……土屋康太」

土屋康太という男子はそれだけを言つと席に着いた。

何だが絡みにくそうな感じだなあ……。いや、そこまで絡みたいとは思えないが。

それにしてもこのクラス何だが濃いな。俺みたいなキャラの薄いのが居ても大丈夫なのだろうか？

「です。海外育ちで、日本語は会話できますが、読み書きは苦手です」

お、珍しく女子。このクラス見たところ男子しか居ないからなあ。

「あ、でも英語は苦手です。ドイツ育ちなので。趣味は」



ふんふん。趣味は？

「趣味は吉井明久を殴ることです」

.....はえ？

ガタンツ。と隣の吉井が大きく後ずさるのを横目で確認した。

そうかそうか。吉井を殴るのが趣味なのか。

羨ましいなあ〜こんな綺麗な子に殴られて。嫉妬し.....ちやわねえよ。何言ってるんだよ。

俺は哀れそうな感じなので吉井を見るが吉井は吉井で冷や汗を垂らしながら必死に目を逸らしていた。

「はろはろー」

彼女はそう言い俺　の横の吉井に手を振る。チツ。リア充が。

「.....あう。し、島田さん」

「吉井、今年も宜しくね」

と言うことは去年も同じクラスか。きっとその時に何かがあったのだろう。聞きたくないけど。

島田、というやつの自己紹介が終わり、それから他のやつの自己紹介が淡々とされていった。

そしてついに俺の横の吉井が立ち、自己紹介を始めた。

吉井は大きく息を吸いこつた。

「コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね」

『ダアアーリイーン!!!!!!』

むさ苦しく野太い多数の声。聞いているだけでも吐き気を催す。

「失礼。忘れてください。とにかくヨロシクお願いします」

吉井は苦笑いを浮かべ何とか誤魔化しているが実際顔が真っ青。足震えてるし。

つて次俺かよ。よし、じゃあ俺は少しまともに行こう。

「ええと。はい。俺の名前は眞浦晃汰です。好きなものはラノベ全般とカラオケとか軽くファッション系とか。嫌いなものは人を『物の様にしか扱わないやつ』や、『人の価値を血統や才能でしか見えない汚物』です。まあさいのうもへったくれもないこのクラスでは仲良くてできると思うので宜しく」

ちよつと喧嘩を売るような事を言ってしまったためか周りの奴がこちらに何か言ってくる。

『才能がないだつて!?!ふざけるな聖典(エロ本)を読みまくった俺はあれだぞ!布越しでも分かるんだぞ!?!』

『ハッ(嘲笑)そんな程度か。駄目だなあ全く。俺なんて湯煙が全

身を覆ってたって出来るぜ？」

『なんだよ、その程度か。俺なんてバスタオルが全身を覆ってたってわかるぜ』

『……なん……だと……！』

馬鹿ばかり。助けて。

そんな当たり前じゃない光景に溜め息をついて席に座る。

そして俺が席についた瞬間扉が勢いよく開き、扉の向こうから女子生徒が現れた。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ？』

何故か皆が驚いたような声をあげ、ざわつき始める。

「丁度良かったです。今自己紹介してる所だったので、姫路さんもよろしくお願いします」

先生がそう催促するとピンク色の髪をもった彼女が肩で息をしながらこちらを向いた。

「は、はい！あの、姫路瑞希と言います。よろしくお願いします……」

なんか見た感じ頭良さそうだけどな。

あるとき倒れてなかったらクラス何だったんだろ。

しかもかなり可愛いし。なんと言つか……保護欲を……。

俺がひとりでに解説をしていると一人のFクラス男子が、

「はいっ！質問です！」

と、勢いよく手をあげた。

「あ、は、はいっ。何ですか？」

「どうして姫路さんがここにいるんですか？」

そんな質問に首をかしげる。

俺は吉井の肩を叩き吉井を呼ぶ。

（……なあ吉井。姫路ってなんなんだ？）

俺がそう聞くと吉井は信じられない。といった顔をして

（……えっ！？嘘でしょ？姫路さんだよ。知らない？頭がよくて可愛いし愛想もいいから皆に人気なんだってさ）

（……へえ。通りで）

彼女には何かしらオーラみたいなものを感じた。

それこそ、『あいつら』が持ってたような天才的なオーラを。でもなんか違うんだよね……根本的な感じが。

そんな事を考えていたら姫路が口ごもってうつ向きしていた。

多分だけと言い出しずらいのだろう。

「その姫路さんは熱だしちゃったせいで途中で試験を止めちゃったんだよ」

「ちよつと！眞浦くん！？」

「んでそれを吉井が王子様の如く颯爽と現れて姫路を助けてたな。いやー。あのときの吉井はかつこよかったなあ〜！」

「え？そ、そう？」

ちよつと吉井は顔を綻ばせ頬を掻く。

「え……？えっ！？よ、吉井君！？」

今まで沈んでいたはずの姫路が急に目を開いて吉井の名を呼び始めた。

この驚き方は……。

「すまん。吉井。お前のフラグは今折れた……」

「だな。姫路、明久が不細工なのは解ってるから一旦落ち着け」

「ちょっと待ってよ二人共！酷くない！？特に雄二！！それでも友達か！？」

「……は？」

「あ、なんか御免なさい。だからやめてその『何言ってるのこいつ』見たいな目。かなりきつい……」

「しかし坂本。吉井はそこまでブサイクではないぞ。そこまで」

「それ遠回しに僕のこと軽くブサイクって言ってる？」

「いいえ！吉井君はブサイクじゃ無いですよ！顔のラインが細くて綺麗だし……あ」

言い切る前に自分の言動を思い返したのか恥ずかしそうにうつむき「終わりましたゆ！」と噛みながら挨拶をして、吉井の後ろに座った。

「ふむ……そう言われると確かに見てくれは悪くない気がする。確か俺の知り合いにもお前のことが好きなやつがいたような気がするし」

おお、良かったじゃないか。知り合いながらこれは知っておきたい情報。

「え？それは誰」

「そ、それって誰ですかっ！？」

吉井の言葉が姫路の声によって遮られる。

何だ。姫路も普通の女の子。こつ言つ噂には敏感だよな。

「確か久保」

久保さん……か。ああ、なんか知性的な名前だなあ……。俺もそういうイロモノのフラグ建てたいなあ。

「利光だったかな」

久保利光（ ）

前言撤回をします。

どうなってんだよ。イロモノにも程があるだろ。どんなルート開拓してんのこいつ？

「……………」

「吉井、声を殺してさめざめと泣くな……………」

さすがの俺も哀れすぎていじる気にならんに坂本、こいつは悪魔か。

「まあ冗談だ。安心しろ 半分は」

「最後の不吉な五文字はなに!？」

「ところで姫路。風邪は治ったのか？」

「あ、はいっ。もうすっかり平気です」

「ねえ雄二！さっきの半分ってなにさ！！」

「おいおい吉井。声がでかいぞ。そんな声だしてたら」

「はいはい、その人たち。静かにしてくださいね」

と、パンパンと出席簿で机を叩き、静かにしろと伝えてきた。

「ほら言わんこっちゃ」

バキィッ！ バラバラバラ……

突如、軽く叩いただけの教卓がごみ屑と化した。

おかしい。なんで出席簿＞教卓なの？普通逆だろ。

流石に息を飲まざる終えない。

これがFクラスって事なのか……！

「えー……。少し、静かにして待ってて下さい。替えを用意してきます」

福原先生は早くも疲れた笑みを顔に浮かべ軽快、とは言えない動きでFクラスを後にした。



「あは……ははは……」

斜め後ろの姫路は苦笑いをしていた。

「雄二、ちよつといい？」

と。

吉井の先程のような抜けた声ではなく、少し真剣味を帯びた声が聞こえた。

「なんだ？」

我がFクラス代表はあくびを噛み殺して吉井の方を横目で見る。

俺も釣られてそちらを見るとそこにいたのはあのヘラヘラしたいつもの吉井ではなく、キリツと、何かを決意したようなそんな顔だった。

「ちよつと、ね。話があるんだ」

吉井は少しだけ姫路の方を見て、坂本を連れ廊下に出ていった。

……なんなんだろうな。

俺は坂本のが移ったのか、欠伸を噛み殺し、生徒の自己紹介をBGMに読みかけのラノベを読むことに専念した。

こんな当たり前が、続くと思いつながら。

### 第三問 始まりの始まり（後書き）

次当たりに雄二の宣言ですね。

ええと。皆様にお願いが。

オリキャラなどがこれだけじゃ心もと無いので読者様に出したいオリキャラなどがありましたら是非書いてください。この小説に出させてください。

決して、無理強いではありませんので、まあ？こんな駄目作品にでも俺のキャラ載せてやるかな。みたいな感じで構いません。お願いします。

**第四問 設備を変えたいか？ならばクリークだ！（前書き）**

今回は中々書きました。

これからが試験召喚戦争です。

#### 第四問 設備を変えたいか？ならばクリークだ！

はあ…… 本当に面倒臭い事になった。

目の前に広がる光景は、まるで当たり前ではなかった。

「行けえー！Dクラスはすぐそこだあー！」

須川が声を張り上げ指示を出す。

『おおー！！』

皆はそれに答えるようにDクラス生徒に向かって次々と何かを呼び出していく。

そして、そこには武器を持った、小さなそれらが居て……はあ、普通じゃない。

廊下には生徒と教師。

『何か』と『ソレら』。

当たり前の様に怒声やら罵倒やら爆音が飛び交うこの空間は、いつの間にかもうそこは。

もうそこは、『戦場』だった。

「では、自己紹介の続きをお願いします」

またボロい教卓を抱え戻ってきた福原先生は  
坂本と吉井が何か言い争いをしながら同時に教室に入ってきたのを見  
てから言葉を続けた。

姫路が……何だって？

「えー、須川亮です。趣味は」

福原先生の言葉によってまた淡々とした自己紹介の時間が流れる。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

福原先生に呼ばれて坂本が席から立ち、ゆっくりと教壇に歩み寄る  
姿にはふざけた雰囲気は一切見られず、その姿は正にだいひょうだ  
った。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

福原先生に問われ、鷹揚に頷く坂本。

てかこのクラスじゃ代表でも嬉しくないだろ。なに少し自慢げなん  
だよ。どちらかと言うと恥にちかくね？

それにも関わらず坂本は自慢に満ち溢れた表情で教壇に上がり、俺らの方に向き直った。

「Fクラス代表、坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

こんなバカ溜まりの中で代表なんて慕ってくれるやつはまずいるのが不安。その前にクラスの奴等にはとにかく不安要素しかない。

だってそうだろ。なにあの黒いやつら。ちょっと西洋の歴史で見たことあるんですけど。

坂本をもう一度見ると坂本は皆が静かになるのを待っているかのように、目を鋭く細め皆を一瞥した。

流石に皆を空気を読み、一度遊ぶ手を止め、意識がそちらに向かう。

坂本はそれを見て満足気に頷き、

「さて、皆に聞きたい」

坂本が、Fクラスの至る箇所を目を向けていく。

カビ臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

つられて、皆がそれらの設備を眺める。

「Aクラスは冷暖房完全設備な上、座席はリクライニングシートらしいが」

一呼吸置いて、静かに告げる。

「不満はないか？」

『大ありじゃあっ！』

二年Fクラスの、魂が響いた。

「だろう？俺だってこのじょうきょうは大いに不満だ。代表として問題意識を抱えている」

『そつだそつだ！』

『いくら学費が安いからってこれは酷すぎる！改善を要求する！』

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ？余りに差が大きすぎる』

堰を切ったかのように次々と溢れ出すFクラスの不満。



「昔の人は言った。『働かざる者食うべからず』とな。俺もその意見に至極同意する。だから、Fクラス諸君。俺達も『働いて獲ようじゃないか』」

こいつの言わんとする事の意味が、解る。分かってしまう。

そして喉が、一瞬にして乾いていく。

まさか……まさかこいつが言ってる事って……。

「お、おい坂本、まさかお前……」

「ああそつだ眞浦。これは俺からの提案だが」

そこで、奴は本性を現した。

今までの様にクールではなく口許には獰猛な笑み。

今までの様に冷静な視線は目には無く、代わりにあるのは燃えるように赤く、意思の強い瞳だけ。

のちの、全ての発端となる全ての原点が、ここで始まる。

「皆。『試験召喚戦争』をやってみないか？」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

突然だが、ここで説明を。

AクラスとFクラス。

この意味はどういったものか。

それは、

エリートと……クズだ。

それはすべてに置いて、だ。

どちらが強い？なんて聞かれたら百人が百人でAクラスと言っだろう。

そしてその事実が何を指すか、それは。

『勝てるわけがない』

諦め。

『これ以上設備を落とされるなんて嫌だ』

諦め。

『姫路さんがいたらなにも要らない』

……………。

ま、まあとにかくその一言は、誰もが諦めてしまつような無理のも  
のだった。

しかし、だ。

文月学園のテスト点数には、際限が無い。

ただ、一時間問題を次々と解いていくだけ。

つまり、頭の良い者なら百点以上の高得点を叩き出せる。

そして裏を返せば、頭の悪い奴はあまり良い点数を出せない、だ。

だが坂本の提案した『試験召喚戦争』はそれだけでは決まらない。

これは、戦争なのだ。

戦い争う、それが『戦争』だ。

これが何を意味するかと言うと、

戦わせるのだ、『召喚獣』を。

これが大体の『試験召喚戦争』の全容。

まずはテストで点数を取り、それが自分が戦う為のポイントとなり、  
それを削りあつて戦うのだ。召喚獣を使って。

戦つて負けると『戦死』なるものがあるらしいがいかんせんまだや

ったことがないので分からない。

確か他にも色々細かいルールがあるのだが、覚えてない。  
ま、生徒手帳見れば良いし。

とにかくだ。この説明を見るに、確実に負けるわけではないが、殆んど言って良いほど勝てる確率は低い。当然それに挑もうとするバカもいないしクラス中は諦めで満ち溢れていた。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

そんな圧倒的戦力差を知りながらも、坂本はそう宣言する。

『何をバカなことを』

『できるわけ無いだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

否定的な発言が教室を包む。

まあ実際俺も今のところやりたいとは思えない。何せAクラスとFクラスだ。こちらで何をやろうとあつちからしたらたんなるちよございな真似でしかないだろう。

「根拠なら、あるさ。それを今から説明してやる。……康太、畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前にこい」

視線が俺へと集まる。

……え？おい坂本。止めてくれよ、なんかかなりイタイポジションじゃないか。

すると姫路の後ろの席の誰かがビクンツ！と跳ね起きる。

目をやるとそこには、土屋康太が……ってまさか……！

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

必死になって首がもげるんじゃないかと思えるほど高速に首と手を振って否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子。

彼は今、頬に畳の跡を残したまま壇上に上がろうとしています。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙なる性識者だ」  
ムツツリーニ

「……………！！（ブンブン）」

土屋、と名乗られた男子がさっきと同じ否定のポーズを取るにも関わらず、教室中は諦めで一気にざわつく。

無論、俺も内心驚いた。

土屋康太、と言われてもスルーしてしまうが、ムツツリーニと来れば話は別、その名前は男子生徒からは畏怖と畏敬を、女子生徒からは軽蔑を以って挙げられる。

『ムツツリーニだと……？』

『馬鹿な、奴がそつだと言つのか……？』

『だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして  
いるぞ……』

『ああ……ムツツリの名に恥じない姿だ……』

うん、いくらそうやって言おうと見た目は結構悲しいぞ？頼っぺた  
に畳の跡＋覗きの疑いつて。

「姫路の事は説明する必要な無いな。皆だつてその力は良く知って  
るはずだ」

「ええっ！？わ、私ですかっ？」

「ああ。ウチの主戦力だ。期待してる」

確かに、対Aクラスとしては唯一のまともな戦力だろう。

『そつだ。俺達には姫路さんが居るんだつた』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいればなににもいらないな』

……そろそろ突っ込んで良いのかな？

「木下秀吉だっている」

木下秀吉。木下ちゃんの事だろう。てかなんかすごいのか？木下は。

『おお………！』

『ああ。確か木下優子の………』

木下優子？なんか聞いたことある……様な気が。

「当然、俺も全力を尽くす」

『確かに何だかんだでやってくれそうだな』

『坂本って確か小学生の時神童とか呼ばれてなかったか？』

『それじゃあ振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったわけか』

『実力はAクラスレベルが二人も居るってことだよな！』

そこにはもう先程のような雰囲気は無い。それどころか坂本。こいつは本当にすごいかもしれない。それどころか坂本。こいつがバカだからかもしれないが一瞬でクラスメイト達の気持ちを集め、集結させ始めてる。食えん奴だ。

行けそうだ、やれそうだ。Fクラスの奴らは口々にそういい始め、空気はもう最高潮一歩前位だ。

そして、そのテンションは　　。

「それに、吉井明久だっている」

.....シン。

一気に落ちる。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

「よ、吉井。ブフツ.....き、きつとなんか有るんだよ.....フフフ...  
...は、腹いてえ」

「フォローしてくれるのは嬉しいけどせめて笑うの止めてからにしてよ眞浦君！」

『誰だよ、吉井明久って』

『聞いたことないぞ』

「ホラ、折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二と違って普通なんだから　　って何で僕を睨むのさ！僕は悪くないよ！？」

「まあ与太話はここまでにして実際吉井ってなんかすごいのか？怒ったら強くなるのか」

「なにその設定。　　ううん。別に僕は特別なものとかないよ。普通だし」



「そうか、眞浦は知らないのか。なら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ」

ジト目で吉井を見ている。あ、目逸らしやがった。

観察処分者ってさ、確か。

『バカの代名詞じゃなかったっけ？』

クラスの誰かが、俺と同じことを口にする。

「ち、違っよっ！ちよっとお茶目な16歳に付けられる愛称で」

「そうだ、バカの代名詞だ」

「肯定するな、バカ雄二！」

観察処分者ってさ、確か勉強ダメダメ。意欲も見られなく、学校の中で問題しか起こさないようなまさにダメ人間に課せられる感じだったはず。

「あ、あの、それってどういうものなんですか？」

姫路が首をかしげる。

「具体的には教師の雑用だな。力仕事とか類いの雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来は、召喚獣は物に触れられない。言ってしまうえば幽霊見たいな

物。床には特殊な処理が施されてるらしいから立てるらしい。

「そうなんですか？それってすごいですね。試験召喚獣って見た目より力持ちって聞きましたから、そんなことが出来るなら便利ですよね」

確かに、と俺も頷く。

「いやいや、実はそんな大したものじゃ無いよ？」

しかし、何故か吉井は否定の意を取る。

『おいおい、観察処分者ってことは、試験召喚獣がやられたら本人も苦しいってことじゃないのか？』

と、俺が丁度疑問になっていたところをクラスの誰かが言ってくれる。

「そうなのか？吉井」

召喚獣がやられたら本人も苦しい。なんか不思議な絵になりそうだな。

「うん、フィードバックっていつて何割か返ってくるんだよ。疲れとか痛みとか。だから雄二っ！僕の働きは期待しないでねっ」

そんな胸をはって言うような事じゃねえだろ。

「大丈夫だ明久。お前はいてもいなくても変わらないからな」

流石は坂本。吉井の心決るの上手いな。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う」

「Dクラスか！」

「なんかやれそうだな！」

「ああ、Dクラスなら勝てそうだ！」

クラスの面々から上がる声。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

当然だ！

「なら何を望む！俺達が這い上がるために！何を望む！」

「クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！ クリーク！」

ちよつと待て。このネタは酷いぞ。

「宜しい！ならばクリークだ！」

言ったああ！こいつ言いやがったよ！俺が言いたい名言ベストファ  
イブを言いやがった！

「俺達に必要なのは卓袱台ではない！」

『そうだあ!』

坂本は皆を静めるように手を上げる。

「諸君……システムデスクを、取りに行くぞ……!」

『ウオオオオオオ!!』

「お、おお……」

「お、おー……」

姫路と俺が、上がりきらないテンションのせいで声が小さくなる。だってそうじゃん。結構これ恥ずかしいよ?

「と、言うわけだ明久。お前にはDクラスふの宣戦布告を命じる」

「……下位勢力からの宣戦布告って大抵ひどい目に遭うよね?」

「大丈夫だ。俺はお前に嘘をついたことは無い。騙されたと思って試してみる」

坂本が優しい目で吉井を諭す。

「……フツ。仕方ないなあ。分かった、僕がいくよ」

「ああ頼んだ。お前以上に適任は居ないんだ」

その言葉を最後に、吉井はDクラスに向かって歩き始めた。後ろ姿

がやけに格好いいぞ。

こうして、俺達の戦いの火蓋は切って落とされた。

**第四問 設備を変えたいか？ならばクリークだ！（後書き）**

誤字脱字、感想など宜しく願います！

これからも、宜しく願います！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8611y/>

---

無能と従姉妹と愉快的仲間

2012年1月4日12時49分発行